

郎氏によって簡潔につけ加えられているので楽しく読める。また、写真撮影時のデータもついているので参考になろう。

巻末には、日本で活躍中のコメットハンターの愛機の写真集と1965年以後の彗星の一覧表がついている。現在日本ではたして何人位の人達が彗星を探し続けているかは良く知らないが、ここに取り上げられた12人、20台の望遠鏡や双眼鏡は、その一端をのぞかせてくれる。いかにも手作りといった感じのものから非常に高価な製品までいろいろな望遠鏡が紹介されているが、この程度の望遠鏡であの彗星が発見できたのかと感心させられたりするものがあるのも楽しい。各観測者による現在の観測方法の紹介がついているので、これから観測を始めようという人達には良い参考になるだろう。ただ、これからおそらく新彗星などとても探す元気も根気も無いという私のような者からすれば、このような望遠鏡よりも、毎夜新彗星発見に情熱を燃やし続けているこれらアマチュア観測家達自身について、もっと知りたいと感じた。顔写真とまではいかななくても、氏名の後に年齢や職業をつけ加えていただけたら、さらに親しみもわいただろうと思う。

彗星の一覧表は1965年以後に発見された全彗星について、種々の要素をまとめたものである。この表を見て、改めて日本人の活躍ぶりに感心させられる。光度は発見時の明るさで示してあるだけであるが、初心者にすれば発見時の明るさよりも、それぞれの彗星が最も明るく、観測しやすかった時に、何等級の明るさで見たのかの方に関心があるのではなからうか。表現の難しい彗星もあると思うが、そのような項目があっても良いと思う。

立派な彗星は見える機会が少いし、暗い彗星は数多くても種々の条件で見るとはなかなか難しい。そのような意味で、本書は価値ある入門書と言えよう。

(半田 孝)

### 新刊紹介

#### 天体観測セミナー (現代天文学講座 13巻)

森本雅樹編

(恒星社厚生閣, 昭和55年4月刊, 2,800円)

現代天文学講座も刊行が進みよいよ全容が明らかになってきた。どの巻もそれぞれ特色と個性を持ったものであるが、この第13巻はとりわけユニークな存在である。編者はここで改めて紹介するまでもない東京天文台の森本氏である。

天体の観測は人々の夢をかきたてるが、実際に行うとなるとそれなりの道具立てとファイトが必要である。本書は天体観測というものをごく身近にある道具でどこまで出来るかを追求したものである。執筆者は学校や社会教育の場で何らかの形で天文学の研究と教育普及の活動にたずさわっておられる方々である。まずは、学校の実験室の片隅で、あるいは家の物置の中で埃をかぶっている望遠鏡を今一度取り出して宇宙からの便りに耳をかたむけてほしいというのが本書のねらいである。

最初に、星の数ほどある星を憶えていくことから説き始める。第1章は特に天文教育の立場から星座観察の指導法にあてられている。中学校でその実践をされている北本氏(p.28の写真のうら若き女性)とプラネタリウムで活躍中の黒田氏のコンビによる執筆は、さすがに系統的な筋立てで、楽しい図と共に親しみ易いものとなった。

第2・3章は小型望遠鏡とカメラによる観測の基礎的な手法が述べられ、第4章でそれらから何らかの天文学的情報を得る試みの例が掲げられている。たとえば、カメラとプリズムの単純な組み合わせで結構立派な恒星スペクトルが取れることなどが示されている。執筆者の一人の半田氏は自らの手になる天体写真を地学教材に活用されている。

流星の観測はアマチュア天文研究者の独壇場である。以前から観測チームを主催しておられる藪氏がその手法を克明に第5章に書きとめられた。小林氏による流星のFM電波反射の観測法も加えられている。曇りでも家の中でも天体観測ができるのである。

最後の章は、おまじかね、素人でも宇宙電波をキャッチできるかにあてられた。森本氏自身が、野辺山の45m電波望遠鏡の建設のかたわら、自宅でテレビの部品を寄せ集めて同じようなもの(?)を試作された。後者がはたして成功したかどうかは、皆さんが本書を購読され確かめられたい。我国では未開拓の分野なので、多くの示唆を含む読みものとなった。

天体観測で成果を得るには、最終的には各自の工夫と努力と運によるところが多い。したがって、この書を読み、今夜からその通りに実行すれば何がしかの結果が得られるものではないことは明らかである。その意味で、本書は入門書、解説書だけではなく、実践記録としての性格を持っているものといえるだろう。天体観測セミナーとはうまい書名をつけたものだ。(横尾武夫)

☆ ☆ ☆